

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会
編集 同窓会会報編集委員会
〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2
TEL(029)822-0137(代) FAX(029)826-3521
ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>



土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠馬 作曲

- 一、沃野一望數百里 関八州の重鎮とて
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水
- 二、春の彌生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影
- 三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男兒の血を享けて 我に武勇の氣魄あり
- 四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男兒 亀城一千の健男兒

目次

- 2面 会長あいさつ
- 2面 学校長あいさつ
- 3面 平成26年度総会報告
- 3面 新任職員紹介
- 4面 卒業60周年記念同窓会
- 4面 卒業50周年記念同窓会
- 4面 卒業40周年記念同窓会
- 4面 卒業25周年記念同窓会
- 5面 恩師を訪ねて
- 6面 卒業生レポート⑱
- 7面 支部会・同期会だより
- 8面 お知らせ・紀行文
- 9面 母校だより 職員室だより
- 10面 部活動報告
- 11面 進路状況報告等
- 12面 平成25年度決算報告等



同窓会会長あいさつ

幡谷 浩史

(高4卒・併2)

同窓会会員の皆様は、誠に於かれましては、ご機嫌よくお越しの事とご推察申し上げます。今後共、当会運営に對し深いご理解とご支援の程、よろしくお願いいたします。

日本は四季がはっきりとした国だと言われており、春夏秋冬の移り変わりを楽しめる自然も豊富に有しています。富士山を始め多くの地域に於いて世界遺産として登録され、最近では富岡製糸場と絹産業遺産群が産業遺産として認定されました。維持管理を堅実に続けた事が評価されたと報じられています。我が母校は、建築後約120年を経過し、3・11や幾多の自然災害に耐えて来ましたが、経年による老朽化を止める事は出来ませんでした。ここ数年、文化庁、県当局と改良工事の折衝を続け、その結果、母校120周年行事の一環として推進事業に組み入れられるまでに進捗し、同窓会としては安堵しているところであります。同時に、1/2負担金捻出等の対策を講じておりますが、同窓会の皆様にもご支援を賜り、目標達成を目指し周年行事としての成功に向けて誠意努力いたします。

のでよろしく願います。詳細については、随時評議員及び学年幹事さんにお知らせいたします。

さて、同窓会の本来の事業は、会員相互OB会の充実親睦交流を図る事、在校生への部活支援やその他施設援助等多岐に亘っています。本年も継続事業として海外派遣研修会を実施し、若人が海外で活躍する姿を見る事で生徒自身が『大志』を抱く事を願っています。

少子高齢化は急速に進み、最近の報道によると茨城県内の小中学校の統廃合は5年間で65校、去年だけでも19校ありました。空き家による街並みの空洞化、近隣同士の希薄化が目立ち、地区によっては「限界集落」から「極限集落」とまで叫ばれる時代に突入しつつあると思われれます。深刻な問題が各業種で山積となり、抜本的な改革を要する事ばかりです。進修同窓会OBの皆さんの団結力が重要です。是非ともリーダーシップをとっていただき、OB会の存在感を示していただければ幸甚です。



学校長あいさつ

学校長 豊崎 利明

進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また部活動や生徒の海外研修等で日頃より本校への多大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。

本校の生徒達はKobisee Onlineの精神の下、日夜「頭鍛え 身体鍛え 心鍛え」る毎日を送っています。本校では勉強+部活+a(校外活動)を勧めています。+aとは外部主催のイベント、ボランティア活動、コンテスト、公募等々に参加することであり、そこでの経験がさらなる成長を促し将来を方向付ける契機となります。たとえ苦い経験でも多くの事を学びます。今年是全国高等学校総合文化祭が茨城で開催され、本校の多くの文化部が出席したり選手として参加しました。その中で物理実験部は全国入賞を果たしました。この「いばらき総文2014」に本校から多数の先生生徒が実行委員として参加し全国のお客様をおもてなしました。また生物オリムピックでは本校生が日本代表候補に選ばれました。

生徒達は上手に学校行事を楽しんでいます。春の高祭(文化祭)は延べ約6千人の来客を迎え新聞社から複数取材を受けました。秋の一高オリムピック、歩く会(今年はかすみがうらコース)と併せて本校の3大行事は常に生徒による企画運営が伝統で、生徒実行委員達のアイデアが生かされています。

さて高校比較では本校が最も魅力ある高校であることを実感して頂くために、2年前から小学生とその保護者を対象にした説明会を実施しております。本校独自の魅力的な企画にSEG(海外研修)、

企業研究所訪問、OB OGガイダンス、東大研、医学研等があります。今年からSGH(スーパーグローバルハイスクール)が加わりました。次代を担うリーダー育成を謳う本校の趣旨と合致するこのSGHの指定を受けるべく、昨年準備委員会を設け、有能で意欲的な委員の先生方の努力と筑波大学及び筑波銀行のご協力のおかげで本校SGH構想が完成し、約5倍の競争率の中、全国56校(本県唯一)に選ばれました。詳細は本校HPをご覧ください。

また本校は定時制を併設しております。専任の教師集団と落ち着いた雰囲気の中、生徒達は作りたての温かい給食を食べ、勉強に部活に頑張り、定通全国大会に毎年複数の種目で出場しています。本校では成人特例入学の生徒が模範生として重要な役割を果たしています。定通生活体験発表会では84歳になる本校生の発表が注目を浴びました。

今後も本校の役割を自覚し、社会で活躍しうる人材の育成と先生方の支援に邁進する所存です。日頃より温かいご支援を頂いております同窓会の皆様にご感謝申し上げますと共に、今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年度

進修同窓会総会開かれる

去る4月12日(土)、本年度進修同窓会定期総会が、母校土浦一高体育館において、祝賀周年卒業生等を含む約400名の皆様のご出席を得て、盛大に開催されました。

(Science Explorers Group) (詳細は土浦一高HP)の代表生徒の成果報告及び学校側よりキャリア教育推進(インターシシップ・職場訪問等)に関わる協力依頼があり、総会は終了しました。

総会は、応援指導部の会場に響きわたる元気一杯のリードと吹奏楽部の演奏に合わせ、校歌・応援歌・一高讃歌の斉唱で開会。物故会員への黙祷、幡谷会長・豊崎校長の挨拶と続いた後、長瀬副会長の議長に選出し議事に移りました。平成25年度事業報告及び決算報告、平成26年度事業計画及び予算、役員改選が、審議の結果、原案どおり可決承認されました。また創立120周年記念事業、旧本館校舍改修促進要望等が報告されました。この後、役員退任者3名に対する感謝状贈呈、同窓会の助成による第5回生徒徒海外研修

続いて、卒業60周年(高6回・定4回)、卒業50周年(高16回・定14回)卒業40周年(高26回・理数3回・定24回)、卒業25周年(高41回・理数18回・定39回)、卒業15周年(高51回・理数28回・定49回)の節目を迎えた学年の卒業周年祝賀式が執り行われました。高17回の堀越博氏より祝辞、幡谷会長より記念品贈呈と続き、最後に高16回の中川清氏より周年招待者を代表し謝辞が述べられました。

この後、会場を移動し、懇親会が各幹事のお骨折りで周年ごとやグループごとに催されました。ここでは美酒を酌み交わしつつ、互



幡谷浩史会長の挨拶



中川清氏の謝辞

いの再会を喜び合い、思い出話や近況報告等に花が咲き、時の経つのも忘れ大いに盛り上がりました。

卒業六十周年記念同窓会

高第六回 君山 良

平成二十六年四月十二日は、我々第六回生にとっては忘れられない日となりました。

校庭の桜は数輪を残すのみとなっていました。在校生時代から馴染みの榎の太木が迎えてくれました。

今回の同窓会には、県内はもとより北は仙台、南は鹿児島から総勢八十余名が参集しました。受付開始時刻のはるか前から三々五々集まり始め、本館前の広場はまるで野外パーティーの雰囲気呈していました。

式典前に旧本館を背景に記念撮影を行いました。皆元気な表情をみせていました。昼食は、学校の厚意でお借りした教室でいただきました。当時の教室とは随分様変わりしていましたが、六十年前を思い出し、皆感慨深げでした。

同窓会総会と周年祝賀式は、体育館で執り行われました。現役応援団の勇壮なパフォーマンスと吹奏楽部の演奏は、式典会場の雰囲気をもたらし、素晴らしいものでした。

午後四時から市内のホテルで祝賀会を執り行いましたが、前回までご参加いただいた先生方がい



らっしゃらなかったことに長い星霜を感じ得ませんでした。この席で遠方より参加の塚田昇君と竹内信好君に故郷を思い出していただき、霞ヶ浦名物の帆船の置物を贈呈しました。次いでホテル別室での二次会に移りましたが、出席者の三分の二近くの参加がありました。大いに盛り上がった後、大林三樹君のリードで「青春時代」を合唱してお開きとなりました。学校主催のこの集いは、今回をもって終了となりましたが、今後も形を変え集いの機会を持ちたいという多くの声がありました。最後になりましたが、六〇年間見守ってくださった学校当局のご配慮に感謝申し上げますとともに、進修同窓会の益々のご発展を祈念いたします。ありがとうございます。

新任職員紹介

副校長 倉持 正男 8年ぶり2



度目の勤務に喜びを感じています。

進修同窓会から与えられた役目に力を尽くしてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。



教頭 猿田 渉 今年度四月

に赴任しました猿田です。本校にお世話になるのは今回で二度目ですが、進修同窓会の皆様の母校に対する熱い思いを日々実感しています。

土浦一高発展のため、微力ながら全力で取り組んでゆく所存ですので、よろしくお願いいたします。



教頭 佃 敦之 4月よりお

世話になっております。進修同窓会の皆様の真摯かつ熱心な活動

に、日々敬意と感謝を覚えております。伝統ある本校のために、微力ながら尽力していきたいと思いま

土浦一高定時制夜間部

第四回卒業 櫻井 光孝



平成二十六年、春四月十二日、母校土浦一高卒業六十周年記念式典に、お招きを受け亦記念品を戴き誠に有りがとう御座いました。私達四回生は昭和二十六年四月百余名が入学母校の門をくぐりました。戦後の未だ厳しい時代でした。退学するもの多く、卒業出来たのは五十二名でした。卒業四十周年五十周年と多くの同級生が集いましたが六十周年にも成りますと、約3分の1の友は旅立つて亦体調不良其の他の都合で八名の参加と成り幹事としては淋しいかぎりです。式典終了後、大和町の大形屋に於て久し振りの同窓会を開き思い出話に時の過るのも忘れ皆学生時代に戻ったようでした。恩師の事、裸電球の片付停電其してロソクの授業、校内スボーツ大会、等々関西旅行の話題では一つ一つがなつかしく、笑顔

笑顔で楽しい一時でした。皆苦労が多かったのに一つの人生やり切った自身が、笑顔と会話がはずんだと思います。母校の関年行事も終了しましたが再会を約束して別れました。一校卒業生として各周年行事に同級生の元気な顔が見られました。これも母校役員の皆様の御骨折のお陰です、心より御礼申上ます。同級生の皆様の御健勝並に進修同窓会、土浦一高の御発展を御祈念申し上げ御礼と致します。

卒業五十周年記念同窓会

高十六回 五頭 英明

私達高校十六回生は、卒業五十周年の節目を迎え、去る四月十二日、母校の想い出深い桜樹の下には百十名の同級生が集合しました。式典会場の体育館では、この日を楽しくみにしていた速来の懐かしい顔々が並び、久し振りに訪れた母校の匂いに浸っていました。平成二十六年年度進修同窓会総会に続いての卒業周年記念祝賀会では、祝辞と記念品を頂戴しました。進修同窓会副会長で土浦市長として活躍する中川清君が各回を代表して謝辞を述べ、母校の思い出、本校卒業の誇りと愛着、そして後輩達への進修同窓生としてに思いに触れながら感謝の気持ちを表しました。

式の後、同窓会会場のマロウド筑波までバスを用意しましたが、かつて通り慣れた懐かしい通学路を徒歩で向う友もおりました。



同窓会は、恩師矢萩力也先生、大竹勉先生、矢口二郎先生、池井芳寛先生、青山和義先生の五名の先生方にご臨席頂いて開催しました。クラス持ち回りである下租鶴町弘君の司会が進められました。冒頭、残念ながら鬼籍に入られた恩師河野利雄先生、小泉新治先生、清水健三先生を始め四十三名の同級生に黙祷を捧げ、代表幹事の中川清君の挨拶、先生方から凛とした中にユーモアを交えた祝辞を頂きました。菊地邦雄君をカメラマンに全員で記念写真を撮った後、柏市在住の雨見二郎君の乾杯で宴が始まりました。五十年振りの再会に胸を踊らせ、飲む程に酔う程に若き日の記憶を蘇らせて、まさに高校時代にタイムスリップして大いに盛り上がりました。三時間を超えて終宴が近づき、指定席と

なっている大川修君の音頭で声高らかに校歌を熱唱し、これも指定席の斉藤倉一君の音頭による万歳三唱で締めました。十六回生は三年毎に同窓会を開催しており、次回での再会を約し、クラス毎の二次会に散って行きました。(了) 追記 母校と進修同窓会の発展をお祈り申し上げます。 卒業四〇周年記念同窓会 高二十六回 内田 欣作 平成二十六年四月二日、前回は五周年同窓会から一五年ぶりに母校を訪れました。三、四年前から始まったという卒業一五周年生と、二五周年生、四〇周年生、五〇周年生、六〇周年生のそれぞれ卒業生九〇〇名程が体育館に集い盛大に総会及び祝賀会が行われました。肅々と行われた行事の中で、まず、目に飛び込んできたのは現役応援指導部の中の女性リーダーでした。四〇年前の我々の世代の時にはとても考えられない光景でしたが、その凛々しさに思わず目を奪われてしまいました。これも男女共同参画社会の有り様かと妙に納得してしまいました。 還暦を間近に控え(既に還暦のお祝いをされた方もいるようだが)久しぶりに会った同窓生は、やや、くたびれた様子の方はいれば、まだまだ現役ばりばりで、これからだという人も大勢いて、懐かしさとともにたくさんの刺激も受けました。その後、場所をマニ



フィカに移しての懇親会では、各クラスの担任の先生方も幾人も見えて、クラスごとに記念写真を撮ったり大いに盛り上がり、我がGクラスではこれがきっかけとなり、年内にクラス会を開催するほどのこととなりました。 これを機ととらえ高校時代にあまり広くなかった人間関係を反省し、たくさんの級友と懇親を深めたいと思っております。 最後に、今回の記念同窓会を開催するにあたってご尽力を頂いた塚原君、黒須君、伊藤さんには本当にお世話になり有難うございました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。そして、今回、参集した同窓生、諸先輩、後輩諸君、並びに参加できなかった卒業生一同、関係者の皆様の今後のご活躍と、一日でも長い健康寿命をお祈り申し上げて、次の五〇周年を楽しみにしております。

恩師を訪ねて

英語科 大竹 勉 先生

在職 昭和二十八年〜昭和四十年(教諭)



台風一過の爽やかな秋の日、亀城公園に近い閑静な先生のご自宅に伺って久闊を叙した。昭和の初め阿見町(君原村)に生まれ、健康やかな幼年時代から、徐々に軍国主義が台頭し、やがて勃発した太平洋戦争の中で多感な旧制中学時代を送る。そして、戦後民主主義が到来し、教育界も変革期を迎える。その激動の青少年時代を通して出会った幾多の良き師、忘れがたい先生達の思い出と共に、その薫陶を受けて教育者としても終始変わらぬ信念を持って、道を全うされた。退職後、念願であった外国に赴いて、その国の学生を教育することに尽力され今日に至っている。耳は少々遠くなられたが、半生を語られる先生は昔のままの穏やかで優しい眼差しだった。ここに、その回想された記を掲載させていただく。

「忘れられない先生」

私が生まれ育った昭和初期の時代は、子供の世界は遊びも娯楽も

選択肢は乏しく学校が中心だった。したがってそこでの教師は大きな存在であり、影響力を備えていた。私は成長の過程で多くの良き師、忘れ難い先生方との出会いに恵まれた。最初は小学校一年担任の仲山正子先生。入学したてで右も左も分からず、不安な子供たち、ある日先生は赤ちゃんを教室に抱いてきて「みんなおいで。赤ちゃんだよ」と和服姿の胸をはだけ、おっぱいを飲ませ始めた。家庭で見られる普通の光景を見せて、子供たちに安心感を与えようとした先生の優しい心がけて、和やかな空気が流れた。そして国民学校六年生担任の鶴町朝治先生。生徒一人ひとりの個性や能力を見出し、「正面を向いて話してくれた。卒業間近のある日、父から「お前、中学へ行くか」と尋ねられた。当時の中学校は一握りの良家の子弟が行くものと思っていた私は驚いた。父を動かしたのは鶴町先生が「是非勉君を中学校に」と熱心に勧めてくれたからというのを後で知った。先生の力は大きかった。そして私は無事旧制竜ヶ崎中学校に合格し、胸躍る一年生となった。担任は牧野秀忠先生であった。先生は英語担当で、授業中は無論、教室外でも英語を使われた。当時自転車でも通学していた私はある日、運動場で競技を見ていた。そこへ先生が通りかかり、「これは君の自転

車か」と訊かれた。無論英語である。すっかり上がってしまった私に「英語では This is mine. となるな」とっこりされて、去って行った。英語への扉を開く忘れられない思い出である。

やがて太平洋戦争が勃発し、次第に学校生活も厳しさを増し動員学徒として工場に通う毎日となった。前年には東京初空襲があり、米軍機がこの地にも飛来し、機銃掃射を浴びせて行く。暗く恐ろしい日々が続いた。動員先には学校から監督の山口秋彦先生が同行された。英語科の優しく穏やかな先生だったが、七月のある時先生は「大竹、この戦争は負けだな。」ときっぱりと言われた。先生は真実を語っていると直感し「はい」と思わず返事をした。当時にあつては禁忌で誰も口にする事のなかつた勇氣ある言葉に感動した。そして一か月後終戦を迎えた。

昭和二十四年お二人の先生の影響や欧米の文化への関心も強くあつたので英語教師を目指し、東京高等師範学校(現筑波大学)に入学した。そして、ここでも後世まで影響を与えられた青木常雄教授に学んだ。先生は当時の英語教育の大家である。旧制竜中から高等師範へと進んで教授となられた方で、個人的にも私の大先輩にあたり、退職後も講師として講義を受けたが、熱意に溢れ、いくつなつても衰えを知らぬ指導であつた。今もって先生の著作を読んでいるが教師の道を選んだうえで多大な影響を受けた。半世紀前の先生は私の中に生きていた。

「土浦一高教師」

教員になって二年目の夏休みの終わり頃、土浦一高から、当時の勤

務校(土浦一高)の私の後任は既に決まり、辞任しても支障ないのでこちらに来てほしいとの声が掛かった。自分の歩く道が、他人様に決められるようで落ち着かない気もしたが、その声に従った。それまで土浦一高には行ったことがなかったのだ。木造の校舎の立派なものには驚いた。外観はもとより、天井の高い玄関、頑丈な廊下など堅固な造りは接する者に落ち着きを与える。移って最初の半年は、いわば見習いのようなものだが、翌年四月からは学級担任となり、人生初の体験をしてゆくことになる。教師ともいえない若造の感動の日々だった。

爾来十数年に亘って英語教師として、あるいはクラス担任として精一杯の体験を重ねてきた。ともすれば進学校としての宿命でもある学業第一に優先して、抑制的な厳しい環境の中にはあつたが、出来るだけ生徒個々の目線に沿ってリベラルな交流を大切にしながら、彼等と共にあつた。その間の数多くの事柄は関わつた生徒たちとの思い出としてここに記すまでもなく、私の教師人生の貴重な財産となつていく。

土浦一高を離れてから、忘れられない事がある。バスの車中である時、卒業して二十数年たつ教え子に再会した。想い出を語る中で彼は「高2の時、先生の答案の点数が間違がってましたよ」と言われた。懐旧の情が言わたのかもしれないが、私は大きな衝撃を受けた。私の行為が彼の人生になんらかの影を落としたことは明らかである。私見ではあるが、学習したこととを当たり前のようにならざるに比べて点数化して序列をつける事

に、以前から疑問を持っていた。答案を返す教室の緊迫した空気はなんとも落ち着かず、生徒個々にとつても大きなストレスとなつたことだろう。教壇にある間ずっとこの是非について葛藤していた。教え子の一言に恥じ入ると共に、改めて教育の在るべき課題を考えさせられた。この道遠しである。

「退官後」

私は退職後に是非してみたい念願があつた。それは英語を学ぶことで得た知識をもって、外国に赴き、当地に暮らして、生活文化や見聞を広めたいという強い想いが年毎に強くなる一方であつた。そして、機会を得て一九九〇年から、中国(二年)、タイ(三年)、スリランカ(二年)トルコ(三年)と各国で日本語を教えた。国によっては英語も教えた。中国では主として大学生に、また、日本へ留学する大学の教師達に、すぐに使える日本語を教えた。タイやスリランカでは日本との貿易交流拠点地で、生きた日本語を教え、トルコでは日本語が大学の選択科目でもあり、関心のある学生や一般市民に教える機会を得た。どの国でも共通して言えることは、日本の教育の観念とは異なり、何の束縛もないのびのびとした「日本語習い」であつた。この十余年の経験から、予てからの、教育とは何かという事に、再び想いを巡らせた。一人ひとりの生徒が何かを求めている。その何かを知ることにさらに一人ひとりの違う何かまで理解しないと本当に教えたことにはならないのではないだろうか。そして生徒をこちらに導くには必ず育てるこの大切さを今更なから再確認したのである。生涯は学習の日々である。

卒業生レポート

19

「アントレプレナシップと働く楽しさを伝える」

昭和41年卒
飯塚 哲哉

(東進会会長、ザインエレクトロニクス株式会社会長)



東進会の今年度総会で大野前会長の後任を拜命することになりました。これまでは先輩や仲間が苦勞して作り上げてこられた環境を、専ら堪能するばかりの立場でしたが、今期からはその環境作りにも微力を絞らなければならぬ立場になってしまいました。しかし、幸い先輩や同輩、後輩の仲間が暖かく協力的でパワフルな人達ばかりなので、何とか役目を果たしたいと願っています。

現在、東進会では、間もなく二百回目を迎える謳粹会という月一度の懇親会、そして、発足したばかりですがアカンサスクラブという講演を軸にした情報交流の場(ほぼ四半期に一度位を目途)などを中心に会員の親睦を図っています。いずれも楽しくて、かつ何らかの役に立つことを目指しています。より多くの会員に是非ご参加頂きたいと思っています。

さて、私が母校土浦一高を巣立つて、もう48年になります。高校時代には、将来は研究者にでも

なるのだろうかと思われていたようでしたが、どっこいそうはならず、研究者から事業家、投資家の道を歩むことになりました。

研究者の道を追いかけていたのは大学院の博士課程の半ば位までだったでしょうか。1975年、学位取得と同時に就いた仕事は大手メーカーの半導体研究所での新規デバイス開発でした。当時、半導体業界では、米国のベンチャー企業(インテル)が1キロビットのDRAMという、やがて半導体記憶装置の主役となる製品を市場に提案し(1971年)、業界に強い衝撃を与えた時代で、他にも研究と産業とが直結する刺激的な事が沢山起こっていました。新規の半導体デバイスの事業化を目指した挑戦的で面白い仕事が多くあり、事業と直結する技術開発がとても面白い時代でした。

しかし、イノベーションを生む主体の多くが日本ではなくシリコンバレーにあることがだんだん分り、会社に無理を言って、1980年、シリコンバレーにあるHP社集積回路研究所に渡り、共同研究をさせて頂くことになりました。そこで仕事も大変楽しかったです。その中でシリコンバレーで働くインド、中国、台湾などのアジアからの友人達がベンチャーなるものを立ち上げていました。彼らの働き方がとてもうらやましく、

そして大きなショックを受けました。世界最先端の応用研究に寝食をわすれて没頭し、失敗しても咎められず、破産して路頭に迷うような悲惨さもなく、再挑戦の機会がいくらでもあり、更に成功すれば嫉みではなく、巨額の報酬と称賛、経済的・社会的なステータアップが実現できる。アジア出身の友人達の多くがそうしたことを実現してゆくのを傍らで見ながら、自分も挑戦しようと思ったことでした。しかし、1980年代は日本産業の黄金時代で、半導体も例外ではなく、まさにJapan as Number one、日本世界制覇せりという感覚を抱くことができた時代でした。そんな時代に大手総合電機に所属して大きな組織を動かしながら国際的な仕事ができることは捨てたいポジションでした。

シリコンバレーでの「洗礼」から10年程経とうとした頃、つまり日本がバブル頂点の頃「日本は凄いい、俺も凄いい、なんでも出来る」という今では誇大妄想とも言える過大な自信と共に、ベンチャー創業を実践する暴挙にでたのです。もちろんリスクのヘッジ策はそれなりに打った積りでしたが、後になって観れば、創業した1991年は日本の「失われた10年」、「失われた20年」と言われた時代が始まっていた年でした。

しかし、幸いにして、ソニー、サンヨーなどの電機メーカーや川崎製鉄、新日本製鉄など、半導体事業に参入を目指す鉄鋼メーカーなどからいくつも仕事を頂く事が出来ました。当時の日本の産業界にはまだ活気がありました。中でも、当時まだ日本に追いつこうという時期にあったサムスンから合弁事業の提案を頂いたのが大変幸運

で、死の谷を越える上で大きな支えになりました。7年後にMBO(経営者による企業買収)を行い、サムスンとの合弁を解消して、その3年後(創業してから10年目)にJASDAQに上場することができました。

その後も多くの幸運に恵まれ、平均成長率約70%を数年継続したり、頻繁にTVで取り上げられたり、政府の重要な委員会のメンバーに招聘されたり、EOY(Entrepreneur Of the Year)を冠した多くの賞を頂いたり、また藍綬褒章、紺綬褒章なども頂戴しました。一方で、世界規模でのTV産業収縮と共に主力だったTV向け商品の売上激減などによる事業縮小の辛酸をなめる経験もしました。

ザイン社では独自の技術を駆使して、画像通信などの高速の伝送方式Vx1(ヴァイワン)というデファクトスタンダード(事実上の業界標準)を確立することが出来ました。約400本に及ぶ契約を締結し国内外のリーダー企業から採用を頂きました。また社団法人日本半導体ベンチャー協会(現NEEDIA)を創設、起業家支援を推進した事と合わせて、米国の電気通信学会IEEEから、その創業者の名前を冠したEustis Weber賞を頂戴する栄誉も頂きました。

特化の投資ファンドも立ち上げました。折しも上場社数が激減する不況期に遭遇し、投資の成果は惨憺たるものでした。しかし、次の世代に伝え継承することは義務とも言える大切なことです。23年継続したザイン社の社長の座も、今年度、12年後輩の者にバトンタッチしました。また長男が当社に転職してくるという事も起こりました。そして土浦一高の生徒諸君が授業の一環として定期的に弊社を見学に訪れて頂けるようになりました。

日本には変化やリスクを非常に毛嫌いする文化があります。安全神話が大好きな余り、災害が発生した際の備えが無く、かえって実際の危険度を高くしてしまう風土があります。投資学の基本にもあるように、「リスクの傍にリターンあり」。優れた科学技術の成果ほど利用上のリスクも大きい。そのリスクを如何にヘッジするかこそが人類の知恵です。僅かなリスクを嫌い、ベンチャーや成長志向の中小企業よりも、安定を求めて大規模な伝統ある企業や組織に人々の尊敬や関心が集まる、この文化が日本の「失われた20年」を作った根深い要因ではないでしょうか。

イノベーションを生み出す過程に関わることは幸福なことです。特に若者がそうした機会に関わり我を忘れて力の限り働けることが本人は勿論、社会にとって極めて貴重なことです。人は皆老いて力を失ってゆくという事に実感を持てる年齢となりましたが、そんな忘我の若者を支援して、その至福感を共有したいと、これからは毎日現場を徘徊し続けたいと思っています。

支部・同期会だより

上海支部

「上海支部」は、いま経済の躍動著しい中国の商業、金融の中心地である上海にて、2014(平成26)年1月20日に土浦一高進修同窓会初めての海外支部として発足しました。

茨城から約2,000km離れた上海ではありますが、5万人余の邦人を擁する世界都市だけあり、土浦一高の卒業生同士の出会いもあり、同窓生で集まるようになってきたことに端を発します。その後、数か月に1度それぞれ近況を報告するなどしていましたが、その席上で、上海にはさらに多くの



同窓生がおり、様々な分野で活躍していることから、今後上海における卒業生の心の拠り所としてもらいたいとの声があがり、正式に「上海支部」の発足に至ったものです。

当支部は15名(2014年8月末現在、男14、女1)とまだまだ小規模ですが、人員構成は60代、20代と幅広く、職種も多岐に及んでいます。上海在住歴も20年を超えるベテランから数か月の者まで様々です。

設立総会では、初代会長に上海歴25年の矢口孝則先輩(高29回)、同じく副会長に中国貿易に従事すること26年の田代祐基先輩(高33回)を全会一致で選出し、進修同窓会会長からのお祝いのメッセージを代読、校歌を斉唱するなど皆で発足を祝いました。

上海支部が取組んでいる活動としては、「希望工程」への寄付協力があります。「希望工程」とは、中国青少年発展基金が貧困地域の教育条件の改善や未就学児童の復学等を資金的に援助するために展開している非営利社会公益プロジェクトであり、「希望工程」を通じて多くの児童が復学し、小学校(「希望小学校」という)が建設されています。当支部では、「希望工程」に賛同し懇親会等で集まった時にお金を出し合い、寄付金を

貯めています。

当支部としましては、今後もしも一層の親睦を図ってまいりたいと存じます。また、この会報をご覧になった上海付近在住及びこれから上海に来られる土浦一高卒業生からのご連絡を心よりお待ちしております。

事務局 前田 俊博(高43回)

応援指導部創部50周年に関して

土浦一高応援指導部OB会

事務局長 伊東明彦(平成5年卒)

土浦一高応援指導部は、平成25年7月の第95回全国高等学校野球選手権記念茨城大会で4回戦まで進み、水城に5対3で敗れました。それと同時に、応援指導部49代の活動は閉じ、当日中に第50代の幹部が指名されました。応援指導部の活動は、7月の高等野球選手権記念茨城大会終了後に、新たな代の幹部が指名され、翌年の高等野球選手権記念茨城大会の敗戦まで続きます。その活動を50回繰り返して、平成26年7月に第50代の活動も終え、第51代に引き継がれました。これにより、応援指導部は50周年を迎えることができました。この間、先に創部していた水戸一高の応援指導部は廃部となり、県下で最も歴史のある応援部となりました。これもひとえに、

学校関係者、進修同窓会、各支部、地域の皆様のご協力・ご支援の賜物と考えております。本紙をもって、お礼申し上げます。

応援指導部の50周年の歴史を支えてきたものとして、応援指導部OB会の存在があり、30数年前に発足し、現役生を支えてきました。

現役生の50周年を迎えるに当たり、応援指導部の現役生とOB会で、50周年記念式典と祝賀会を実施させて頂きました。記念式典には、豊崎校長、幡谷進修同窓会長を始め多くの来賓にご参加頂き、100名近くの参加者を得て盛大に実施することができました。来賓の皆様からは、多くの祝辞も頂き、有難うございました。記念式典では、創部の経緯から50年間の歴史紹介、現役生への記念品贈呈、現役生による演舞披露が行われました。現役生への記念品贈呈では、大太鼓、部旗のケース、50年間の部員の名前を記した木札、腕章、部訓看板を贈呈させて頂きました。来年以降の野球応援では、大太鼓による校歌が球場全体に響き渡ることを思います。

応援指導部の歴史の一端をご紹介させて頂くと、応援指導部創部の濫觴は、1989年の旧制尋常中学校下妻分校との野球の試合、1904年の第1回県下連合野球大会による応援合戦、1949年には応援指導部の前進である応援団結成、1957年の甲子園出場があります。1964年には当時の早稲田大学応援部所属の小松崎清氏の指導により、応援指導部が新たに発足しました。その後、水戸一高との定期戦、楯石真弓氏(故人・弟3代)のご遺族からの部旗

(「楯石旗」)の寄贈、女性部員の誕生、土浦一高讃歌の応援歌導入、マーチ系の充実、進修同窓会からの「校旗制定百年記念旗」の寄贈などがありました。特に、2004年の県下連合野球大会開催100年、旧本館竣工100年、校旗制定100年といった「3つの100年」事業の一環で実施した「校歌祭」は、歴史的に関係が深い、水戸一高、下妻一高、龍ヶ崎一高の応援団・吹奏楽部を招待し実施され、4校の校歌が土浦一高の体育館に響き渡りました。

応援指導部は、今後も、土浦一高の歴史・校風・校歌を守るとともに、校歌の歌詞のとおり、校水の旗を立てて、我が校風を県下に輝かせ続けたく考えております。今後も現役生をご指導・ご鞭撻頂けますようお願い申し上げます。



土浦第一高等学校百二十周年記念事業

本校は、明治30(1897)年、茨城の二番目の中学校として創立したことは、ご承知のとおりです。したがって、2017年には創立百二十周年を迎えることとなります。その間、校舎は軒々としましたが、明治37(1904)年真鍋の現在地に移り今日に至っています。

校舎建築には当時県予算全体が百万円余のところ、六万円余の莫大な資金が投入されました。そして若き県技師駒杵勤治の設計と、棟梁青木仙次郎の指揮により、ゴシック風の見事な建物が真鍋台に誕生しました。

その後、地元の人々の協力により植栽もすめられました。翌年植えられた五本の楠の苗木もすくすく育ち、今では天まで届くかの



ような大木に成長しています。(残念ながら、戦後一本が枯れ、現在は幹周り四m前後の三本だけです)

ところで、従来、校舎建築に際しては、外国人の設計によるものではないかと考えられていたものが、昭和49年、一色史彦氏(中11回)によって棟札が見いだされ、駒杵氏の設計であることが判明し、二年後、旧制中学校等の建物としては、全国で最初に重要文化財として国より指定されたのです。(現在本校の他は、同じく駒杵の設計になる太田一高講堂、福島安積高校本館、富山福野高校本館、岡山津山高校本館のみです)この校舎での授業は、現在の校舎ができる昭和56(1981)年まで続き、多くの卒業生が天井の高い荘厳な教室で学んだのです。ただ、その後は一部の部屋を生徒会・吹奏楽部・弦楽部が使用するのみにとどめていましたが、昭和62(1987)年の創立九十周年を契機に資料展示室が整備され、平成14(2002)年からは同窓会旧本館活用委員会によって一般に公開するようになりました。とはいっても、常に使用している状態ではなく、雨漏り等もあって建物の傷みも目立っていました。そうした中で、先の東日本大震災により、玄関天井の漆喰の崩落、玄関柱のズレ・土台の煉瓦

部分の損傷等が発生する事態に至りました。



同窓生にとって心のふるさとである校舎を永久に守っていききたいとの思いは強く、いろいろな場で、これまでも修築等に関することが話題になってきましたが、ついに百二十周年の事業の中で実行しようということになりました。

昨年度以来、数度の役員会を開き検討を重ねるとともに、県との交渉を続けた結果、国・県としては、予算的な問題もあり、耐震補強のための事業として実施する方向性が示され、本同窓会は百二十周年記念事業として進めることに決しました。百二十周年事業の主な内容については以下の通りです。

- ①旧本館改修
- ②記念行事
(記念式典・講演・祝賀会)
- ③100周年記念誌発行
- ④同窓会会報記念号発行
こうした事業の実施にあたり、

同窓生の皆様には格段のご協力をお願いする次第です。特に、募金について、以下のように、進めていますので、詳細については、後程ご連絡いたします。

- ・記念事業に関する募金
 - ①1口1万円(1口以上)
 - ②目標額 1億5千万円
- なお、寄付に係る税関係につきましては現在茨城県・土浦税務署へ手続き中です。

硬式野球部 ダックアウト竣工のご報告

野球部顧問 井上 正治
本年3月、土浦一高硬式野球部ダックアウト(一・三塁側ベンチ)が完成いたしました。そして、その竣工を記念し、3月29日に竣工披露試合(対戦校・慶應志木高校)を開催いたしました。

このダックアウトの建設計画は、硬式野球部OB会「亀城クラブ」(会長島田卓光・高15回)が主体となって、硬式野球部保護者の賛同のもとに進めて参りました。次世代まで使用できる、しっかりとした構造物を求めたため、何分に予算の面で十分とはいえない状況になり、一時は計画の実施が危ぶまれました。そこで、進修同窓会にご相談、お願い申し上げたところ、平成18年度の野球部グラウンド脇更衣室の建設に続いてのご支援を頂戴いたしました。起工に至ることができました。

達には気持ちも新たに生き生きと活動しております。甲子園の心を求めて、その願いがかなうその時を信じて、彼らは今を生きています。これもひとえに同窓会の皆様方のご支援のお蔭と心から感謝する次第です。「人は環境をつくり、環境は人をつくる」。今後とも本校教育の発展のためにご協力のほど宜しくお願いいたします。



母校だより

第六十七回一高祭

3年B組 佐々木 唯

こんにちは。第六十七回一高祭の実行委員長を務めました、佐々木と申します。一高祭が閉幕してから四ヶ月近くが経とうとしており、月日の流れの速さを実感しております。

昨年の一高祭が閉幕し、実行委員長に就任して以来、私達実行委員会が掲げていた目標に「新しいものを作る」というものがありました。今までの伝統を次世代に引き継ぐだけではなく、新たに伝統を築こうと考えたのです。そんな思いを込め、テーマも「砂時計」



にしました。そして私達はそれぞれの委員会で新しい企画を考え実行し、見事成功を取めました。もちろん成功までの道のりは決して平坦ではありませんでしたが、どんなに苦しい時でも支え合えるメンバーだったから成功する事が出来たと考えております。きっと第六七回のメンバーが一人でも欠けていたら成し遂げる事は出来なかつたでしょう。素晴らしい仲間と出会えた事に感謝すると共に、実行委員会の皆さんと一高祭を創る事が出来た事を誇りに思います。私にとっては一生の宝です。各委員会の引き継ぎも完了し後輩が新たなスタートを切っている姿を見ると、かつての自分が思い浮かび、とても懐かしく思います。私達の残した事をしっかりと引き継ぎ活動している姿はとても頼もしく、来年の一高祭が楽しみであります。後輩の晴れ舞台が無事成功する事を心よりお祈りしています。

最後になりましたが、第六七回一高祭の開催にむけてご協力頂きました先生方や保護者の皆様方、地域の方々はこの場を借りてお礼を申し上げます。本場にありがとうございました。卒業された先輩方の意志を引き継いだ、一年に一度の祭典にぜひ足を運んで下さい。

文科省指定「SGH」

SGH推進室長 豊島 卓

今年3月、全国の高校を対象に始めたスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業に応募し、約四倍の競争を勝ち抜き、茨城県で唯一指定を受けました。指定期間は五年間、初年度の予算は約千六百万円です。この事業内容は、国際的な教養を身に付けるため、課題解決力やコミュニケーション能力を磨くため、大学や企業などとの継続的な連携を強め、海外研修も行います。

研究開発構想名は「生物資源を活かすビジネスを起業する課題研究で育むグローバル人材」としました。「グローバル」とはグローバルとローカルを組み合わせた造語で、地域の良さを知り、農作物などに優れた本県の生物資源をテ



マに、世界に通用する起業を考える、という意味を込めました。

研究内容は、生徒たちの自由な発想を基礎に、農作物の輸出拡大や、霞ヶ浦のアオコを使ったバイオマスエネルギーの活用、水資源の枯渇と獲得競争などを想定しています。調査・研究だけでなく、実際にビジネスとして取り組むために、法的にクリアしなければいけない課題等も学ぶ予定です。

対象は一年生三百二十人で、夏季休業中から具体的な取り組みに入りました。週二時間の「国際」の授業の中で、グループワークなどを行っています。

連携も活発に行っています。藻から燃料油を作り出す「藻類バイオマス」の研究を進めている渡辺信筑波大学教授や、社会学が専門の岡田幸彦同大准教授らが生徒を支援しています。また、筑波銀行は、会社組織の仕組みや経営上の心構え、海外でのフィールドワークのなど、起業に向けた講演をお願いしています。

二年生に進級後、約四十人を選抜し、十程度のグループで課題研究を進める予定です。海外の大学への研修や、海外の高校との交流なども検討しています。

十月二十一日、つくば国際会議場でキックオフシンポジウムが開かれました。「世界の仕組みを理解し、課題を見つけ、他者の立場などを尊重して、解決に導く決断ができる人材を育成したい。」その思いが始動します。

職員だより

英語科より

英語科主任 豊島 卓

平成二十五年度末に行われた定期人事異動により、全日制の稲葉裕一教頭先生が明野高校の校長先生として、定時制の石井孝教頭先生が水戸桜ノ牧高校教頭先生として、全日制講師の新橋浩先生が竜ヶ崎一高の講師として、江面毅先生が下妻一高の講師として転出されました。また玉造守教諭がご退職されご家族でアメリカへ移住されました。そして、倉持正男副校長先生を竜ヶ崎一高より、猿田渉教頭先生を明野高校より、定時制の佃教頭先生を茗荷崎高校より、全日制の高橋剛教諭を石岡商業高校より、猪越さゆり教諭(高62)を新規採用として、助川博夫先生(高21)を非常勤講師としてお迎えしました。

今年度の学年担当は、第三学年は、菅谷豊教諭(高31)、諏訪原哲教諭(高34)、森田正彦教諭、櫻井友裕教諭、助川博夫講師(高21)、第二学年は、諏訪原哲教諭(高34)、井川裕司教諭(高45)、中山千哉教諭、猪越さゆり教諭(高62)、第一学年は、豊島卓教諭、土子亮教諭、高橋剛教諭が担当しています。

指導形態は、授業中心とサイドリーダーを堅持しています。教科書の徹底理解で培った基礎力でサイドリーダーを読み込んでいく手

部活動報告

弓道部

2年H組 永野さおり

創立半世紀を迎える弓道部は、二年生十七名と一年生二十名、計三十七名で活動しています。毎日の練習の中では、一人一人の射技の向上と課題の克服を心がけて弓道に取り組んでいます。さらに、他校との練習試合や合宿を行い、大会での上位入賞を目指しています。特に、春と夏に進修記念館で行う恒例の合宿は、一日中弓に触れ、普段の部活動よりも多くの時間を

法は、難関校に合格できる英語力養成にとどまらず、将来世界で活躍できる国際人養成へつながっていると確信しております。英語科職員室は、本棟と特別棟をつなぐ二階渡り廊下沿いにあります。本棚には、昭和40年代からの「全国大学入試問題正解」(旺文社)が睥睨(へいげい)し、各先生方の机上には、パソコン、iPad、ポータブルスピーカーが並び、新旧の主役が一同に会しています。今年度、文科省からSGH(スーパーグローバルハイスクール)の指定を受け、英語に特別な関心を寄せる生徒が多くなってきました。その期待に応えるべく、日々邁進しています。



集中して練習に充てる事ができるので、実力向上のための貴重な機会です。昼も夜も同じ空間で同じ時間を共有するため、部員同士の絆と信頼関係も強くなります。他校との練習試合は、公式戦さながらの緊張感の中で行うので、己の技量を正確に測る事ができ、癖や弱点の発見に繋がります。このような練習の成果が現れ、我が弓道部は、この二年間で、関東行きの切符を連続して三回手にしてきました。団体戦で一回、個人戦で二回です。この勢いを途絶えさせることなく、より大きなものにして、全国大会に出場する事が部としての目標です。現在の弓道部を支えているのは、昨年赴任された顧問の門井寿通先生に教えていただいた「射則生活」という言葉です。この言葉には「弓道の稽古は、そのまま人生を学ぶことである」という意味

最近の定時制の様子

があります。私たちは、普段の生活から弓道人としての自覚と誇りを持ち、礼節を忘れず、何事にも真剣に取り組むことと、部活動を通して、各自が自分の生き方に真摯に向き合い、人として成長することを心がけて、日々精進を重ねていきたいと思えます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。最後になりましたが、六月の一高祭では、旧本館後ろの弓道場にて、未経験者を対象とした弓道体験という催しを行っております。ご来校の折には是非お立ち寄りください。

- ・「土浦一高定時制が県内のトップランナーであるために」。
 - ・「地域の生涯学習機関の役割を十分に果たすために」。
- 以上の職責を果たすべく、私たちが定時制教職員は日々仕事に励んでいます。今年度4月から現在までの教育活動のいくつかを振り返ります。
- 1 定時通信制大会での主な活躍
 - 以下のとおり、生徒たちは今年度もめざましい活躍をしました。
 - (1) 剣道部
 - ①茨城県予選(個人戦)
 - 優勝、準優勝、第3位、第5位
 - ↓ 全国大会に個人戦3名、団体戦4名がエントリーされました。
 - ②全国大会



・個人戦3回戦進出 ・団体戦予選リーグ2位

(2) 陸上競技部

- ①茨城県予選
 - ・男子1500m 優勝
 - ・男子走り幅跳び 優勝
- ②全国大会
 - ・男子走り幅跳び 第3位
- (3) バドミントン部
 - ①茨城県予選
 - ・男子ダブルス 優勝、準優勝
 - ・男子シングルス 第3位
 - ・女子ダブルス 準優勝
 - ・女子シングルス 準優勝

2 茨城県高等学校校定時通信制生徒生活体験発表大会について

10月4日(土)、本校を会場に茨城県高等学校校定時通信制生徒生活体験発表大会が行われました。本校からは3学年 吉田郷里さんが出場しました。吉田さんは現在84歳です。高齢者となってから、高校に通うようになりました。そ

3 広報活動の活発化

地域社会に定時制教育の理解を深めるために、今年度より、ホームページをこまめに更新すること生向けに「土浦一高定時制日より」を発行し、定期的に配布させていただきます。

本校定時制は、日々魅力ある教育活動を展開しています。地域からますます愛される土浦一高定時制の実現を目指して、これからも職員一同努力を続けていきたいと思えます。



進路状況報告

平成二十六年入試報告

東大・京大・東工大32名

東大21名で20名台をキープ

筑波大53名

進路指導部長 木村 幸彦
平成26年度入試は、受験人口の減少にともない、センター試験の志願者数も減少となり、国公立志願者の母集団自体が縮小した。また、旧課程による最後の入試ということも加わり、昨年(センター試験難化)とは別の理由で、全国的には弱きな出願傾向がみられた。

センター試験志願者数は、約56万人で、前年度より約12,000人の減少であった。国公立の志願倍率は4.78倍(国立4.34、公立6.54倍)で、前年度の4.84倍よりやや低下した。これは、先に述べた通り、受験人口自体の縮小によるものであり、国公立大学の人気自体は大きく変化していない。また、少子化等の影響で「無理せず、より確実に、あるいは地元」という安全志向・地元志向は継続している。学部系統別では、文系では、教員養成・教育、外国語が減少。人文は、やや減。法は、微減で前年度並。理系では、増減は少なく前年度並。「文低理高」の傾向は持続している。

大学入試センターの発表によると、昨年平均点が大きくダウンした数学IAは、+10.1と

アップしたが、国語は、さらにダウンし過去最低となった(平均点98.7)。本校生の平均点は、文系が638.4点(昨年比-22.9点)、理系が665.2点(昨年比-1.0点)で、文系理系とも思うように伸びなかったが、全国的な傾向に反し、例年通り、第一志望(主に難関国立大)に挑戦した生徒が多かった。このため、現役合格率は、やや低かった。次年度に期待したい。

今春の入試結果について、主なもの挙げると以下のようである。

東大21名(新卒8名)
京大6名(新卒1名)
東工大5名(新卒0名)
東北大学20名(新卒11名)
筑波大学53名(新卒33名)
国公立大医学科17名(新卒4名)
東大は昨年度24名、今年度21名と3名減少したが、なんと20名台をキープした。内訳は、現役で、文一に1名、文三に3名と4名が合格した。理系は理科一に3名、理科二に1名であった。残念ながら、後期日程では合格者はでなかつた。近年、東大をはじめとする難関大への現役合格は、やや厳しい状況であることは否めない。外部環境の変化もふまえ、より一層の学習指導・進路指導の充実が必要である。地元筑波大は、53名が合格。昨年より11名増加、東北大は20名で、1名増加した。総じては、難関国立大を目指す姿勢を崩さずに健闘したといえる。

平成26年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

Table with 3 columns: 大学, 合格者, 新卒. Lists public universities and their admission statistics.

Table with 3 columns: 大学, 合格者, 新卒. Lists public universities and their admission statistics, including a summary row for national/public universities.

Table with 3 columns: 大学, 合格者, 新卒. Lists private universities and their admission statistics, including a summary row for private universities.

平成25年度 進修同窓会決算書

収入総額 12,754,031円
支出総額 10,094,413円
差引残額 2,659,618円(平成26年度へ繰越)

平成26年度 進修同窓会予算書

収入総額 12,470,000円
支出総額 12,470,000円
差引残額 0円

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(△), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 繰入金, 寄付金, 雑収入, 合計.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較残額(△), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 繰入金, 雑収入, 合計.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額(△), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 生徒活動特別補助費, 旧本館改修促進費, 予備費, 合計.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較残額(△), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 生徒活動特別補助費, 旧本館改修促進費, 予備費, 合計.

上記のとおり決算しました。

平成26年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 轄谷 浩史

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成26年3月31日

監事 熊足井 木立井 部作寿
監事 熊足松 土寛泰

上記のとおり提案いたします。

平成26年4月12日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 轄谷 浩史

※項目間の流用を認める。

編集後記

▽表紙写真を、こ連続の「荘厳な趣のある旧本館」から、今号は「野球応援や高祭に躍動する現役生」に変えました。圧巻フォトは、母校の瞬の妙が鋭くとらえられ、私たちの心に訴えかけてきます。
▽今年3月に土浦高が文科省よりS日(スーパ)クロバルイスクールに指定を受けました。全国の並みいる有名高246校(茨城県内8校を含め、国立10校公立117校、私立119校)が応募し、指定されたのは56校(県内は本校のみ)。これを弾みとして、母校がさらにステップアップすることを願ってやみません。
▽今年、青色の発光タイオードを開発した赤崎勇夫先生(村修)の日本人3教授が、JAL物理学賞に輝きました。同窓生の中にも、JAL賞受賞候補者に名を連ねる方がいると聞き、来年以降の発表を胸躍らせて待ち焦がれる次第です。
▽築110年を迎える旧本館、明治期の洋風建築の粋を集め、厳かな学びの空間が広がる感懐は多くの人を魅了し、ドラマチックな地として「おひさま」(NHKTV)、「長谷川町子物語」(フジTV)等に活用されています。今秋は「ファミリーヒストリー」(石田純編)、「NHKTV」若者たち2014(フジTV)の撮影現場になりました。
▽旧本館改修工事と創立120周年記念事業が来年度から本格化していきます。改修工事では屋根根柢ト瓦復原、耐震補強等が中心に進められ、記念事業では旧本館改修工事記念式典開催、記念誌発行等が計画されています。これに伴い、進修同窓会は募金活動を始めます。皆様方には何卒ご協力をお願い致します。

進修同窓会規則(抜粋)
第十二条 本会の経費は第十条の入会金、年会費、終身会費及び篤志寄付金を以て充てる。
一年会費は、六年度以降は、三千元以上とする。
二年、終身会費は、三万円以上とする。

平成二十七年 進修同窓会総会の御案内
次年度進修同窓会・卒業周年記念祝賀式は、次の通り開催いたします。
一、期日 平成二十七年四月十一日(土) 午後一時
二、場所 土浦第一高等学校体育館
卒業周年記念祝賀式
卒業60周年 高7回、定5回
卒業50周年 高17回、定15回
卒業40周年 高27回、理4回、定25回
卒業25周年 高42回、理19回、定40回
卒業15周年 高52回、理29回、定50回
一般会員・周年記念該当会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

- 校内 諏訪原 倉持 大塚 宇田川 鈴木 鴻木 鈴木 堀越 谷中 富永 長戸 青山 山田 田隆 義士
編集委員長 山田 隆 義
編集委員 山田 隆 義